1971.12.16 明治大学新聞

14日

渡辺教授 授業介入団交

策動粉砕の戦線構築の契機に

和泉

十二月十四日、十一時ごろ和泉地区において、「学費値上げ」策動を粉砕せんと文学部の学友を中心に授業介入団交が行われた。

一番教室では、渡辺保教授（文日本史・評議員・元文学部長）の授業がおこなわれていたが、「評議員である教授に対し、学費値上げ策謀の進行状況と教授個人の立場を鮮明にするよう要請する」と質問が開始されると、教室内からそれを支持する声が上り、さらに中庭にいた学友が続々と結集して熱っぽい雰囲気の中で一時間半にわたり、団交が続けられた。

渡辺教授は「病気がちで現在は評議員会を休んでいてわからない」と一切の責任をのがれようとしたが、学友から「学費値上げ」に対する立場を鮮明にせよ、賛成なのか反対なのかと追求され、「学費は上げない方が望ましい」と答えた。しかし、反対の理由を問われるや返答に窮するような内容の無さを暴露した。

さらに、学友諸君が「学費値上げこそ、中教審路線実施の具体的布石であるし、「教育」を一部特権階級のものにせんとしている。とりわけ、農学部切り捨て、二部改廃、文学部蔑視（カリキュラムの再編）そのものこそ、中教審答申の実体化ではないか。」と鋭い追求により、その返答さえしどろもどろという有り様であった。69年全共闘Mの中で暴露されていった「教授」そのものの実態は何ら現在も変っておらず、ただ、「研究」にいそしむ専門バカの姿に対し、学友諸君の追求が激しく、渡辺教授は遂に、全面的に自己批判確約をしていった。とりわけ、渡辺教授は69年当時文学部長の要職にあり、大学立法闘争圧殺の立役者であったし、現在の恒常的ロックアウト体制そのものも69年10・9以降の当局の攻撃としてあることを考えるなら、学友諸君の怒りが爆発したのも当然であった。

最後に延四百名にのぼる学友諸君に対し、授業介入を設定した学友から「恒常的にクラス・サークルからの闘いを起こし、学費値上げ阻止を契機に、授業内容そのものを問う闘い、自らの存在そのものを問う闘いを組織しよう」とアッピールがなされ、圧倒的に授業介入団交を終えていった。

その場でかち取られた確約書の内容は、

一、学費値上げ反対の立場を明らかにする。

一、教授会、評議会において、値上げ阻止のために最大限努力をする。

一、教職における問題に関し、三木・斎藤両教授に大衆的な話し合に応ずるよう要請する。

一、時間制ロックアウト体制、学費値上げに対する抗議声明、69年当時の自らのとった行動に関する自己批判を明大新聞紙上にのせる。

以上